

山に登る理由^{わけ}

県教育庁教育次長

村 木 智 幸



毎年、春から秋にかけていろいろな山に登っている。県内では、那岐山、毛無山、蒜山、泉山。時々、四国に渡って、三嶺、赤石山系。そして、年一回は遠出して石川県の白山。山登りを始めた頃はモチベーションも高く、富士山はもとより、北アルプスの山々にも登ったが、いろいろと調べて行程を組んで、新しい山にチャレンジするということが面倒になり、ここ数年は、登ったことのある山をその時の気分でセレクトして、ふらつと出かけている。

平均的には、登山口まで車で二時間、登りに二時間といったところだが、頂上に滞在するのは、たかだか十分程度。頂上にたどり着くことが目的だとすれば、それに投じる努力と成果の享受、コストパフォーマンス的にはかなり非効率な作業である。

それでも登るのはなぜか。体にいいことをしているという充実感、自然の中での爽快感

はもちろんだが、それだけではない。私にとって最大の「山に登る理由」は、素晴らしい人たちと出会い、すれ違い、そうした人たちと共有するひとときが心地よいからである。

山に登る方はご存知と思うが、山では、人とすれ違えば、必ずあいさつをする、細かい所では道を譲り合う。こうしたことが、ごく自然に行われるのはなぜか。それは、同じ目的目標を持って同じ時間を共有しているという仲間意識と、同じ目標に向かって努力している、汗を流しているという相互理解から来る、尊重、いたわり、といった気持ちの表れである。

折しも道德の教科化が間近となっているが、その目指すところは、平たく言えば、人間がお互いに理解し尊重し合い、気持ちよく暮らせる社会をつくる、といったところと思っており、私の「山に登る理由」と共通していると考えている。